第二章　中君の物語　中君の不安な思いと薫の同情

［第一段　匂宮の婚約と中君の不安な心境］

*女二の宮も、御服果てぬれば（第二皇女の藤壺姫も母女御の一周忌も過ぎて喪服期間も終わったので）、いとど何事にか*憚りたまはむ（もう何も縁談を伏せておくこともございませんのでしょうか）、　*「をんなにのみや」と原文で呼称されるのは初めてかと思う。が、この藤壺姫宮が＜第二＞皇女であるという説明は未だ無い、かとおもう。だから、この「おおんぶくはてぬれば」とあることから、この主語が藤壺姫宮であると知れ、その藤壺姫宮を「女二の宮」と此処で呼称する事で、藤壺姫宮が第二皇女であると、私にはやっと分かる。親の服喪は一年だったかと思うので、一周忌明けの夏の話、なのだろう。　*「はばかりたまはむ」の「たまふ」は女二の宮に対する敬語のようだが、この「はばかり」は宮自身の動作でもなく、かといって周囲が宮に＜奉る＞ことでもなく、宮がそういう状態にあるという事情説明の丁寧語、らしい。

「*さも聞こえ出でば（中納言が婚意を申し出てくれば、話を進めよう）」と思し召したる御けしきなど（とお考えの帝の御内意など）、告げきこゆる人びともあるを（知らせ申す侍従たちもいるので）、　*「さも聞こえ出でば」は注に＜主語は薫。女二宮を所望したら、の意。＞とある。話題は「女二の宮」なので、「聞こえ出づ」が薫君の申し込みらしい察しは付くし、注記されれば確認できたような気にもなるが、流れ読みでは直前の話題が匂宮の浮気性だったので、「さも」の代名詞が何を示すのかは紛らわしい。やはり、「されど、その年は変はりぬ」の一文は、すっかり口調が改まっているのだろう。

「あまり知らず顔ならむも、*ひがひがしうなめげなり（あまり知らん顔をしているのも、変に前の恋の傷心を引きずっているようだし、失礼だろう）」と思し起こして（と気を取り直して）、ほのめかし*まゐらせたまふ折々もあるに（薫君は藤壺姫に求婚の御手紙を差し上げなさる事が何度かあったので）、　*「ひがひがし」は＜偏屈だ、ひねくれている＞とあるが、出生事情は秘密なので、他人に対して説得力のある意固地さとなると、宇治姫と死別した傷心くらいしか言えないだろう。　*「参らす」は＜お届け申す、差し上げる、申し上げる＞。主語は薫君で、藤壺姫宮に対する敬語のようだから、「聞こゆ（御手紙を差し上げる）」の上級敬語、だろうか。

「*はしたなきやうは（私の結婚申し込みが無作法である事など）、などてかはあらむ（どうしてあるものか）。*そのほどに思し定めたなり（帝もその方針で姫を中納言に降嫁させなさるという予定にお決めになったらしい）」　*「はしたなきやうは」は注に＜以下「思し定めたなり」まで、薫の心中。＞とある。「などてかはあらむ」が敬語遣いではないので、いくら心中文とは言え、この「はしたなし（無作法だ）」は薫君自身についてのことなのだろう。ということは、主語は＜藤壺姫宮との婚儀＞ではなく、薫君の＜結婚申し込み＞に違いない。　*「そのほどに」は訳文に＜婚儀を何日に＞とあるが、この「ほど」は＜日取り＞ではなく、「その」薫君の申し出を受けるという＜方針に＞という文意に読んで置く。

と伝てにも聞く（と人伝にも聞くし）、みづから御けしきをも見れど（自身でも帝の御意向を見知ったが）、心の内には、なほ飽かず過ぎたまひにし人の悲しさのみ、忘るべき世なくおぼゆれば（心の内には今もなお亡くなった宇治姫の悲しさばかりが忘れられそうもなく思われて）、

「うたて(遣り切れない)、かく契り深くものしたまひける人の(ここまで心に残るほど縁が深くいらっしゃった人が)、などてかは、さすがに疎くては過ぎにけむ(どうしてあのように他人のままで死んでしまったのか)」と心得がたく思ひ出でらる(と納得し難く思い出されます)。

「*口惜しき品なりとも(下級身分の者であっても)、かの御ありさまにすこしもおぼえたらむ人は(あの宇治姫に少しでも似ている人なら)、心もとまりなむかし(気も引かれるだろうに)。 *「くちをしきしな」は注に＜以下「見たてまつるものにもがな」まで、薫の心中の思い。『完訳』は「大君追慕から、身分を度外視してまで、彼女に似る女との結婚を願望。後の浮舟登場の伏線か」と注す。＞とある。「くちをし」は＜残念だ→情けない→劣っている→下位の＞という言い方らしい。

*昔ありけむ香の煙につけてだに(白氏文集にある漢の武帝が亡き夫人をその煙に呼び出したという反魂香を焚いてでも)、今一度見たてまつるものにもがな(もう一度姉姫にお会い申したいものだ)」 *「むかしありけむかうのけぶり」は注に＜『源氏釈』は「白氏文集」李夫人を指摘。＞とある。この「香の煙」は訳文には＜反魂香(はんがんかう)の煙＞とあって、その「反魂香」は白居易文集の「李夫人詩」で日本に紹介された、という意味の注釈のようだが、とても不親切な注釈だ。尤も、「反魂香」については総角巻六章三段に宇治姫姉妹が故八宮を偲ぶ場面にも引かれていたので、今回の注は簡素に済ませたということかもしれないが、だとしても、読者の理解に資する注釈なら、むしろそのことまで指摘してあってさえも良いくらいではないのか。「李夫人詩」は幾つかの漢詩解説サイトを雑観したところ、大辞泉の「反魂香」項目に＜それをたくと死者の魂を呼びもどして、その姿を煙の中に現すという想像上の香。中国の漢の武帝が、夫人の死後、恋しさのあまり香をたいてその面影を見たという故事による。＞とある、その故事がなるほど引かれて詠まれていた。ただ、「反魂香」の話としては、長屋の職人が其を「反魂丹」という富山の薬と取り違えるという落語をユー・チューブのアップで聴けた事が何よりの収穫だった。

とのみおぼえて(とばかり思われて)、やむごとなき方ざまに(尊い皇女との結婚話を)、いつしかなど急ぐ心もなし(いつになるかと逸る気持もありません)。

*右の大殿には急ぎたちて(右大臣の源氏殿にあっては、この中納言と女二の宮の婚儀の動きを聞き知ると、その後塵を拝すは忍びなしと、六姫の結婚を急ごうと思い立って)、「八月ばかりに(当家の婚儀は八月頃に)」と聞こえたまひけり(と匂宮に申し上げなさいました)。 *「右の大殿」は＜みぎのおほとの＞ではなく「みぎのおほいどの」と読みがある。ちょっとしたことだが、確かに重々しい。「急ぎ立つ」は＜急に思い立つ＞または＜急ごうと思う＞で、此処では後者で、六姫が止むを得ず匂宮と結ばれた、という形を避けたい、という親心というか親の見栄みたいなものを示しているのだろう。

*二条院の対の御方には(二条院に輿入れなさった宇治姫の対の御方は)、聞きたまふに(この御婚儀をお聞きになると)、 *「にでうのゐんのたいのおおんかた」は宇治の妹姫の二条院に輿入れ後の呼称で、「対の御方」という呼び方は早蕨巻二章四段に初出していた。

「さればよ(やはりそうか)。いかでかは(どうしても)、数ならぬありさまなめれば(両親も亡くし有力な血縁者もいない私は、物の数にも入らない立場なので)、かならず人笑へに憂きこと出で来むものぞ(必ず惨めに貶められることが出て来るものだろう)、とは思ふ思ふ過ごしつる世ぞかし(とは思いながら暮らしてきた三の宮との結婚生活だった)。

あだなる御心と聞きわたりしを(宮は浮気性と聞いていたので)、頼もしげなく思ひながら(頼りなく思いながら)、目に近くては(私の目の前では)、ことにつらげなること見えず(特につれない素振りも無く)、あはれに深き契りをのみしたまへるを(情け深い情事に耽っていらっしゃるのを)、にはかに変はりたまはむほど(急にお変わりになったら)、いかがはやすき心地はすべからむ(どうして平静でいられようか)。

*ただ人の仲らひなどのやうに(臣下身分の妻のように)、いとしも名残なくなどはあらずとも(全く忘れ去られるような待遇ではないとしても)、いかにやすげなきこと多からむ(どんなにか心穏やかならぬことが多くなるだろう)。　*「ただうどのなからひ」は注に＜臣下の夫婦仲。自分は皇族であるという誇りがある。＞とある。「なからひ」は＜間柄＞の語感なので＜夫婦仲＞とも言えるだろうが、「間柄」は＜関係性＞だから三の宮の皇子身分を絶対視すれば、この「なからひ」は宇治姫が＜臣下身分としての妻の立場＞だったら、という文意かと思う。

なほ(やはり)、いと憂き身なめれば(私はとても情けない身の上のようなので)、つひには、山住みに帰るべきなめり(遂には山暮らしに帰る事になるのだろう)」

と思すにも(と考えても)、「*やがて跡絶えなましよりは(あのまま山暮らしを続けて出家していたよりは)、山賤の待ち思はむも人笑へなりかし(村人が待ち思う気持ちも嘲笑となるだろう)」返す返すも(と返す返すも)、宮ののたまひおきしことに違ひて(故八宮の言い置きなさった遺言に背いて)、草のもとを離れにける心軽さを(草庵を離れてしまった軽率さを)、恥づかしくもつらくも思ひ知りたまふ(引け目にも辛くも思い知りなさいます)。　*「やがて」は現代語では＜そのままにしておけばそのうちに(そうなる)＞という作用傾向を示す語用がほとんどなので、古文にある語用の＜すぐに、直ちに＞や＜即ち、従って＞や＜正に、他ならならぬ＞という語感が掴み難い。此処の「やがて」は＜上京せずに宇治に留まっていれば＞という文意のようなので、言い換えとしては＜そのままで＞で良さそうだが、しかし現代語の＜そのままで＞は「その」が何を示すのかが明示された上でか、わざとぼかしてかの語用であり、一般指示語としての「あの」「その」「この」の遠近称法で言えば、都に居て宇治を思うのだから＜あのままで＞と言うべきか。しかし、この「やがて」には＜そのうちにそうなる＞という語意は無い。語意は、むしろ＜あのようにしていれば＞だ。少し単語構成を見ると、「や」は場面想定の係助詞で列挙語用の＜ある場合にはこのようであり＞みたいな語感、「が」は条件項における部分的な主語を示す格助詞で＜～が～であるとして＞という論理語、「て」は叙述の順序立てを示す接続助詞で此処では条件項の末尾を示す構文記号。つまり、その場合の「や」う「が」実現し「て」、という言い方であり、この文では「や」に代入できる具体内容が下に＜宮ののたまひおきし＞と明示されている。何と、この単語の＜作用傾向を示す＞という構成自体は、現代語にもちゃんと引き継がれているではないか。なお、「跡絶ゆ(あとたゆ)」は＜世間から身を隠す→出家する＞。「なまし」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に反実仮想の助動詞「まし」が付いた過去仮定文型で＜～であったなら＞。

「故姫君の(亡き姉君が)、いとしどけなげに(とても柔らかい物腰で)、ものはかなきさまにのみ(はっきりしない言い方ばかりで)、何事も思しのたまひしかど(何事も思い仰っていたが)、心の底のづしやかなるところは(心底がずっしりなところは)、こよなくもおはしけるかな(この上なくいらっしゃったものだ)。

中納言の君の(中納言の源氏君が姉君との死別を)、今に忘るべき世なく嘆きわたりたまふめれど(今も忘れられないと嘆き続けていらっしゃるようだが)、もし世におはせましかば(もし御存命であったら)、またかやうに思すことはありもやせまし(姉君も中納言殿に輿入れなさって、また私のようにお苦しみになる事もあるかもしれない)。

それを、いと深く(それを深慮にも)、いかでさはあらじ(決してそんなことにはなるまい)、と思ひ入りたまひて(と思い入りなさって)、とざまかうざまに、もて離れむことを思して(あれやこれやと遠ざかる事をお考えになって)、容貌をも変へてむとしたまひしぞかし(出家までしようとなさったのだ)。かならずさるさまにてぞおはせまし(きっとそうでいらしたに違いない)。

今思ふに、いかに重りかなる御心おきてならまし(今思うに何と重い御決心だったことだろう)。亡き*御影どもも、我をばいかにこよなきあはつけさと見たまふらむ(父宮と姉君の霊魂たちも私をどんなに浅はかと思っていらっしゃることだろう)」　*「御影ども」は＜みかげども＞ではなく＜おおんかげども＞と読みがある。父と姉の霊魂。

と恥づかしく悲しく思せど(と気が引けて悲しくお思いになるが)、「何かは(何も私が気を滅入らせた所で)、かひなきものから(どうなるものでもないから)、かかるけしきをも見えたてまつらむ(こうした様子もお見せ申すまい)」と忍び返して(と対の御方は我慢し直して)、聞きも入れぬさまにて過ぐしたまふ(三の宮と源氏六姫との婚儀は聞き知らぬようにして過ごしなさいます)。

[第二段　中君、匂宮の子を懐妊]

宮は、*常よりもあはれになつかしく(匂宮は婚儀が迫ると、いつに増して丹念に優しく)、起き臥し語らひ契りつつ(起きるに寝るに寝物語に)、この世ならず(この世ならず来世までもと)、長きことをのみぞ頼みきこえたまふ(変わらぬ愛ばかりを願い申しなさいます)。　*「常よりもあはれ」な匂宮の心境は対の御方への愛情が増したのではない。匂宮は六姫本人には興味があって、手紙を絶やさなかった。が、嫌気を覚えるのは源氏殿の圧力だ。幼少時から頭が上がらないこの人物は臣下だというのに、父帝も敬意を持って応対する大臣であり、何よりも中宮が親しく絶大な信頼を寄せる実兄であり、匂宮自身も最も信頼する伯父である。絶対権威の帝位に備えるべき皇太子にと、一方では期待されながら、その自分が頭の上がらない臣下を頼る、という不都合な図式を不快に思うのは普通の論理だ。が、権威など同一集団内の統率象徴でしかないので、どんなに絶対などと声高に言っても、本質的に内部では必ず相対優位でしかなく、外部はその限りに於いて集団の代表者として認めているに過ぎない。王家こそ、そういう客観姿勢を持たなければならないのではないか。ともあれ、この対の御方への匂宮の傾倒は、そういう匂宮の子供じみた権威への反発だと、対の御方には分かるので、少しも安心できないのだろう。

さるは(ところで)、この*早月ばかりより(この五月頃から)、例ならぬさまに悩ましくしたまふこともありけり(対の御方は普通と違って体調不良でいらっしゃることがありました)。こちたく苦しがりなどはしたまはねど(ひどく苦しがりはなさらなかったが)、常よりももの参ることいとどなく(普段よりは物を召し上がる事が極端に少なく)、臥してのみおはするを(横にばかりなっていらっしゃるのを)、まださやうなる人のありさま(まだ妊婦の変調を)、よくも見知りたま

はねば(匂宮は良く御存じなかったので)、「ただ暑きころなれば、かくおはするなめり(暑さの所為でお弱りなのだろう)」とぞ思したる(というようにお思いなのでした)。　*「さつきばかりより～」は、五月頃から御方に妊娠の兆候が現れたという、大きな事情変化なので、注意すべき文だ。

さすがにあやしと思しとがむることもありて(それでも変だとお気付きになる事もあって)、「もし、いかなるぞ(もしや妊娠ではないのか)。さる人こそ、かやうには悩むなれ(そういう人はそのように苦しむようだから)」など、のたまふ折もあれど(など宮が仰る時もあったが)、いと恥づかしくしたまひて(御方はとても恥ずかしがりなさって)、さりげなくのみもてなしたまへるを(そうではないようにばかり応じなさるのを)、さし過ぎ聞こえ出づる人もなければ(でしゃばって申し上げる女房もいないので)、たしかにもえ知りたまはず(宮ははっきりとはお分かりになりませんでした)。

八月になりぬれば(八月になってから)、その日など(婚儀の日取りを)、他よりぞ伝へ聞きたまふ(御方は取り巻きから伝え聞きなさいます)。宮は、隔てむとにはあらねど(宮は隠そうとするのではないが)、言ひ出でむほど心苦しくいとほしく思されて(言い出すのが申し訳なく気が引けて思われなさって)、さものたまはぬを(何も仰らないのを)、女君は、それさへ心憂くおぼえたまふ(御方は女心に、当の妻本人が他人事のように夫の結婚話を他から聞かせれる疎外感まで心外にお思いなさいます)。忍びたることにもあらず(人目を忍ぶ事ではなく)、世の中なべて知りたることを(世間中に知れ渡った盛大な挙式予定についてを)、そのほどなどだにのたまはぬことと(事情を知るべき身内の者にその日程さえ仰らない情けなさと)、いかが恨めしからざらむ(どうして恨めしくない事がありましょう)。

かく渡りたまひにし後は(御方がこのように二条院にお移りなさってからは)、ことなることなければ(特別な事情が無ければ)、内裏に参りたまひても、夜泊ることはことにしたまはず(匂宮は御所に参内なさっても夜泊まることは殊更なさらず)、*ここかしこの御夜離れなどもなかりつるを(他の愛人宅の御外泊などもなかったが)、にはかにいかに思ひたまはむと(急に他に泊まる事になると、御方がどうお思いになるかと)、心苦しき紛らはしに(気詰まりになる紛らわしに)、このころは(宮は最近は)、時々御宿直とて参りなどしたまひつつ(時々御所で殿居ということで泊まりの参内をなさって)、かねてよりならはしきこえたまふをも(事前に馴らし申しなさるのも)、ただつらき方にのみぞ思ひおかれたまふべき(御方にはただ辛いこととばかりに思い置かれなさるのでしょう)。　*「ここかしこのおおんよがれ」は注に＜匂宮の愛人宅での外泊。＞とある。あちこちに出掛けて夜に家を空ける、みたいな言い方だろうか。妻帯者が女遊びで家を空ける事、を当時は良くこういう言い方をした、と思えば良いのだろう。が、決して分かり易い言い方ではない。

［第三段　薫、中君に同情しつつ恋慕す］

中納言殿も(中納言殿もこの匂宮と六姫との婚儀を)、「いと*いとほしきわざかな(対の御方には実に気懸かりなことだ)」と聞きたまふ(とお聞きになります)。　*「いとほし」は事物を心配して気遣う時に使う語のようだが、是を＜気の毒だ＞とか＜可哀相だ＞と言い換えるのはいつも躊躇する。この婚儀が宇治姫にとって気の毒で可哀相な事情なのは、実際に辛いのだから間違いではないだろうが、その事情は何も今に始まった事では無い。表立っての支援勢力を持たない宇治姫が皇子の正妻に就けないことは初めから分かっていたこ

とだ。むしろ宇治姫は対の御方として、不相応なほど厚遇されている。確かに王家血筋ではあるだろうが、扶持のある宮家を継いでいる訳ではないので権威実態は無く、血筋だけで言えば六姫だって曽祖父は桐壺帝だ。だから客観的に見れば、対の御方が殊更に気の毒な立場とは言えず、あくまで、中納言の関心が対の御方にあった、という事情として読みたいので、此処では客観的な形容表現は避けたい。

「*花心におはする宮なれば(派手好きでいらっしゃる宮なので)、あはれとは思すとも(御方を愛しくはお思いでも)、今めかしき方にかならず御心移ろひなむかし(新しい方に必ず御心は移るに違いない)。　*「はなごころ」は注に＜以下「あはれなるべけれ」まで、薫の心中の思い。『集成』は「浮気なご性分の宮のことだから。以下、薫の心中。「うつろふ」（色あせる、散る）と縁語」。『完訳』は「はなやかさに惹かれる浮気心」と注す。＞とある。語感では＜派手好き＞。

*女方も、いとしたたかなるわたりにて(新婦の御実家もとてもしっかりした格式ある家柄なので)、ゆるびなく*聞こえまつはしたまはば(休む間も無く盛大に婿を接待して、新婦をまとわせ申しなされば)、月ごろも、さもならひたまはで(御方はこの数ヶ月独り寝に慣れていらっしゃらないので)、待つ夜多く過ごしたまはむこそ、あはれなるべけれ(宮を待つ夜を多く過ごしなさるのがおいたわしい)」　*「をんながた」は新婦の御実家＝源氏殿、らしい。　*「聞こえまつはしたまふ」の主語は源氏殿で、六姫を匂宮にまとわし申す、のだろう。

など思ひ寄るにつけても(など考え付くにつけても)、

「あいなしや、わが心よ(間抜けな私の心だったものだ)。何しに譲りきこえけむ(どうして妹姫を匂宮にお譲り申してしまったのだろう)。昔の人に心をしめてし後(私は亡き姉姫に恋してからは)、おほかたの世をも思ひ離れて澄み果てたりし方の心も濁りそめにしかば(俗世を離れて悟りきっていた仏心も濁り始めたので)、ただかの御ことをのみ(ただ姉姫との恋の成就ばかりを)、とざまかうざまには思ひながら(どうしたらいいものかと思いながら)、さすがに人の心許されであらむことは(そうは言っても相手の気持が受け入れないままに体の関係になることは)、*初めより思ひし本意なかるべし(止むを得ない事情でなければ家を構える資格がない、と私が初めから仏心に傾倒する理由と考えていた自分の穢れた出生の運命に、適う生き方ではない)、と憚りつつ(と自制しつつ)、　*「初めより思ひし本意」は、「おほかたの世をも思ひ離れて澄み果て」むと思い立つ理由となった、自分の出生の過ちある事情に規定されてるのだろう。

ただいかにして(ただどうにかして)、すこしもあはれと思はれて(少しでも好きと思われて)、うちとけたまへらむけしきをも見むと(姫が私に心を許しなさる態度を見たいと)、行く先のあらましごとのみ思ひ続けしに(先行きが上手く行く事ばかりを思い続けていたが)、

人は同じ心にもあらずもてなして(姉姫は私と同じ気持ちとは違うように応対して)、さすがに(そうは言っても)、一方にもえさし放つまじく思ひたまへる慰めに(偏に私を突き放さないで置こうとお考えになった善後策として)、同じ身ぞと言ひなして(同じ血筋だからという言い訳で)、本意ならぬ方におもむけたまひしが(本命ではない妹君を私に差し向けなさったのが)、ねたく恨めしかりしかば(気に入らず憎らしかったので)、

まづ、その心おきてを違へむとて(早くその姉姫の考え方を変えなければなどと)、*急ぎせしわざぞかし(慌てた所為か)、など、あながちに女々しくものぐるほしく*率て歩き(無闇に女々しく物狂おしく匂宮を引き連れて)、たばかりきこえしほど思ひ出づるも(妹君と結ばせようと、謀り申したことを思い出すにも)、いとけしからざりける心かな(実に浅慮だった)」　*「急ぎせしわざぞかし」は＜慌ててしまったので＞という挿入句で、「など」は「違へむとて」を受けている構文なのだろう。現代語では「など」は前置される。　*「ゐてありき」は、薫君が匂宮を宇治へ連れ出した、ということのようで、注には＜『集成』は「敬語のないのは、薫の気持に密着した書き方」と注す。＞とある。

と、返す返すぞ悔しき(と返す返すも残念です)。

「宮も、さりとも(匂宮もいくらなんでも)、*そのほどのありさま思ひ出でたまはば(その時のことを思い出しなされば)、わが*聞かむところをもすこしは*憚りたまはじや(妹君への宮の熱愛ぶりを知る私が、六姫への軽々しい心変わりを外聞に知るところを少しは恥じて、遠慮なさらないものか)」と思ふに(と思うに)、　*「そのほどのありさま」は＜あの手引きした夜のこと＞や＜薫君に宇治姫を紹介された事情＞などの恩義ではなく、宇治姫に夢中だった＜宮の入れ込みぶり＞のことのようで、そういう事情を知る薫君の手前、安易な心変わりは軽々しいという文意らしい。　*「聞かむ」は、「聞く」の未然形に未来推量の助動詞「む」が付いた＜聞くことになるだろう＞という言い方のようで、注には＜匂宮と六の君の縁談の噂か。＞とある。　*「憚りたまふ」は＜自粛なさる＞くらいの言い方のようだ。ただ、私のような者が想像するにだに、六条院夏の町の一条宮の養子格である六姫に、宇治姫はどう見ても対抗出来得る立場ではなく、その客観情勢もこの薫君の内心文の文意を、非合理的な分かり難いものにしている、ように思う。

「いでや、今は、その折のことなど(いや、今はその時のことなど)、かけてものたまひ出でざめりかし(その一端に関わることさえ宮は口に出しなさらないだろう)。なほ、あだなる方に進み、移りやすなる人は(やはり、情に流され易い人は)、女のためのみにもあらず(女に対してだけでなく)、頼もしげなく軽々しき事もありぬべきなめりかし(何事にも信頼が置けず軽々しい事も有り勝ちなようだ)」

など、憎く思ひきこえたまふ(などと薫君は匂宮を憎く思い申しなさいます)。わがまことに*あまり一方にしみたる心ならひに(薫中納言は自分の信念に余りに偏って染まった考え方から)、人はいとこよなくもどかしく見ゆるなるべし(匂宮の生き方は実にこの上なく非難がましく思えるようです)。　*「あまり一方にしみたる心ならひ」の所為で、薫君の心中文は分かり難いようだ。やはり、論理的にも、情勢判断の上からも、薫君は変な言い方をしているのだろう。こういう当時の現代語文は、今の現代語文で理解するのがとても難しい。

[第四段　薫、亡き大君を追憶す]

かの人をむなしく見なしきこえたまうてし後、思ふには(中納言はあの姉姫を亡くし申しなさった後に思うことには)、帝の御女を賜はむと思ほしおきつるも、うれしくもあらず(帝が皇女を下さろうとお決めなさったことも嬉しくはなく)、この君を見ましかばとおぼゆる心の、月日に添へてまさるも(この妹君を妻にしていればと思えて来る気持ちが、日を追うほどに強くなるの

も)、ただ、かの御ゆかりと思ふに、思ひ離れがたきぞかし(ひたすら同じ血縁者と思えば、その思いから逃れられないのです)。

はらからといふ中にも(姉妹の仲と言っても)、限りなく思ひ交はしたまへりしものを(御二人はごく親しく思い交わしなさっていた間柄だったので)、今はとなりたまひにし果てにも(姉君は御臨終の間際にも)、「とまらむ人を同じごとと思へ(後に残る妹を私と同じように思って、御世話下さい)」とて(と言って)、

「よろづは思はずなることもなし(多くは望みません)。ただかの思ひおきてしさまを違へたまへるのみなむ(ただ、妹を身代わりにしようとした私の考えをあなたが拒みなさったことだけが)、口惜しう恨めしきふしにて、この世には残るべき(残念で恨めしいことと、思い残ります)」とのたまひしものを(と仰っていたので)、天翔りても(霊魂が空を駆け下りてまでも)、かやうなるにつけては(このような事態を)、いとどつらしとや見たまふらむ(いっそう辛いこととお思いになるだろう)、

など(などと薫中納言は)、つくづくと人やりならぬ独り寝したまふ夜な夜なは(呆然として自から進んで独り寝をなさる近頃の夜毎に)、はかなき風の音にも目のみ覚めつつ(束の間の風の音にも眠れずに)、来し方行く先(今までの経緯や先行きなど)、人の上さへ(自分のことばかりか、妹君のことまで)、あぢきなき世を思ひめぐらしたまふ(ままならない世の中を思い巡らしなさいます)。

*なげのすさびにものをも言ひ触れ(一時の気紛れに口説いて体を求め)、気近く使ひならしたまふ人びとの中には(身近に召し使い馴らしていらっしゃる女房たちの中には)、おのづから憎からず思さるるもありぬべけれど(自然に気を許しなさる相手もいたようだが)、まことには心とまるもなきこそ(本気で妻にしようとする者が居ないのは)、*さはやかなれ(薫君の淡白な性分からなのです)。　*「なげ」は「投げ」と「無気」の掛詞だろうか、投げ遣りなその場限りの一時的な気分、みたいな言い方のようだ。現代語にも引き継いでいるが、今は専ら＜無造作な、簡単にする＞という語用だ。「すさび」は＜気の進み→気まぐれ、思い付き＞。注には＜『完訳』は「以下、女房らとの関係。薫を慕って大勢の女房が参集」と注す。＞とある。薫君が三条宮邸に多くのお手付き女房を囲っていたことは匂兵部卿巻二章五段に簡潔に印象深く語られていた。　*「さはやか」は＜気分が晴れ晴れとして快いさま。さっぱりとして気持ちがよいさま。＞と大辞泉にあり、現代語の「さわやか」は正にそのように語用される。が、この語が文字通り＜「さ」は「や」か＞という成り立ちなら、原義は＜それはそれとして考えて置く＞だから、冷静で分別がある姿勢とも冷淡で本気にならない態度とも見受けられる恵まれた環境で育った優秀な人物、という正に薫君にぴったりの性格だ。それに加えて、薫君は生来の芳香を備え、眉目秀麗とあっては、惑わされた相手の女は堪ったものではない、のかもしれない。それでいて本人は出生の過ちに悩みを抱え、同様の屈折した境遇の者との宿命の出会いに救いを求める、といった適う見込みの無い求愛に彷徨う、という果てしない設定は連載好色本、というかポルノの定番の狂言回しだ。ところで、この「こそ」の係り結び文型は理由説明の文意を示しているが、此処での構文は是が主文というか結論提示になっていて、下の「さるは」以下に詳細が語られるようだ。

*さるは(それというのも)、かの君たちのほどに劣るまじき際の人びとも(かの宇治姫姉妹の身分に劣らないほどの女たちも)、時世にしたがひつつ衰へて(時世に従って身を持ち崩し)、心細

げなる住まひするなどを(頼りない生活をしている者などを)、*尋ね取りつつあらせなど(探し出しては仕えさせていたのが)、いと多かれど(三条宮邸の女房には多かったが)、　*「さるはかの君たちのほどに劣るまじき際の人びと」は注に＜『完訳』は「視点を変え語り直す。大君・中の君も、客観的には薫にとって女房ほどの位置でしかないとする」と注す。＞とある。ただ、「さるは」は上文の「さはやかなれ」という総論を受けて、その詳細を語るもので＜視点を変え語り直す＞といっても、変わるのは焦点だ。　*「たづねとりつつあらせ」は注に＜『集成』は「没落した名家の子女で、縁故を辿って三条の宮に女房として仕えている者も多いという趣」と注す。＞とある。「尋ね取る」は＜探し出して迎える＞と古語辞典にある。「あらす」は＜居させる＞。主語は女房ではなく薫君かと思うが、敬語遣いは無い。「尋ね取りつつあらせ」が一般説明の言い方で、それを此処では名詞化語用しているのだろう。また確かに、此処に語られるように、屈折した背景事情を持つ名門子女に共感するという薫君の一般性向だけでは、なぜ宇治姫だけに強く固執するのかは説明できない。やはり弁が、というより故父藤原君が弁をして引き合わせた縁という思いに薫君は縛られている、ように私には思える。ところが、先読みの前語りは不本意ながら、以下の文を読んでも、そういう説明にはなっておらず、意外だった。と言っても、意外な理由が述べられている、というより、以下の文意は私には実は意味不明だ。

「今はと世を逃れ背き離れむ時(そろそろ出家しようと決心する時に)、この人こそと、取り立てて、心とまるほだしになるばかりなることはなくて過ぐしてむ(この人はと取り立てて執着が無いように暮らしていよう)」と思ふ心深かりしを(と思う気持ちが薫君には深かったが)、

「いと、さも悪ろく(こうも姉君が忘れられないとは、実に如何にも見苦しく)、わが心ながら、*ねぢけてもあるかな(我ながら、大変な執着ぶりだ)」　*「ねぢく」は＜ねじれる、ひねくれている＞と古語辞典にあるが、「ひがむ」と同様に＜頑なに固執する＝非常に執着する＞という語用もあるのだろう。

など、常よりも(などと、いつになく逡巡し)、やがてまどろまず明かしたまへる朝に(そのまま一睡もせずに夜明かしなさった朝は)、霧の籬より(霧深い垣根に)、花の色々おもしろく見えわたれる中に(秋の花がいろいろと美しく見渡される中に)、*朝顔のはかなげにて混じりたるを(朝顔がはかなそうに混じり咲いているのを)、なほことに目とまる心地したまふ(薫君はやはり特に目に止まる気がしなさいます)。「明くる間咲きて(朝の内だけ咲いて)」とか(とか言われるように)、常なき世にもなずらふるが(無常の世に準えられる花である事が)、心苦しきなめりかし(同情されるのでしょう)。　*「あさがほ」は秋の花なのか。キキョウ(桔梗)の古名という説もあるらしく、キキョウが秋の七草である事に符合する、という場合もあるようだが、此処では下に「明くる間咲きて」とあるので、今のアサガオのことのようであり、この話題が旧暦八月のことだとすると、当時のアサガオが今の暦の九月くらいに咲いたか、咲くものもあったか、とにかく小学校の夏休みのアサガオのツル栽培以来、夏の花の定番に思っている私の印象とはズレル。ただ、姉君の死は昨年の十一月中旬ないし下旬(総角巻七章)で、特に姉姫を朝顔に準えるべき逸話も無かったかと思われ、「はかなげ」の一言で象徴させようとするのには、幾分と強引な印象も受ける。というか、この比喩は良く分からない。

格子も上げながら(宵の内から格子戸を上げたまま)、いとかりそめにうち臥しつつのみ明かしたまへば(形ばかりに横になって夜明かしなさったので)、*この花の開くるほどをも(この朝顔の花が咲く様子も)、ただ一人のみ見たまひける(薫君はたったひとりで御覧になったのです)。　*「この花の開くるほど」は如何にも暗示的な言い回しだが、姉君を朝顔に例えた意図が不明なので、この言い方の意図も分からない。後で見直すようになるのかも知れない。ただ、「ただ一人のみ見たまひける」の文意に付いての私

の印象では、薫君は何処まで行っても自分の視野を広げる事が出来ずに、結局は姉姫の心情は理解出来ていないままだ、という事情説明に感じられ、それは即ち、同じ宇治姫である妹君に対しても、同様の独り善がりな態度で接する事になる、という示唆のようではある。

［第五段　薫、二条院の中君を訪問］

人召して（薫君が従者をお呼びになって）、

「*北の院に参らむに（北隣の二条院に参ろうと思うので）、ことことしからぬ車さし出でさせよ（簡素な車を用意せよ）」　*「きたのゐん」は注に＜以下「車さし出でさせよ」まで、薫の家人に対する詞。二条院をさす。薫の三条邸から北側にあたるので、こういったもの。＞とある。従って、補語する。

とのたまへば（と仰ると）、

「宮は、昨日より内裏になむおはしますなる（宮は昨日から御所にいらっしゃってお留守です）。昨夜、御車率て帰りはべりにき（昨夜。隣家の従者たちが御車を引いて帰って来ています）」

と申す（と侍は申します）。

「さはれ（それは構わない）、かの対の御方の悩みたまふなる（かの対の御方が御病気のようなので）、訪らひきこえむ（御見舞申す）。今日は内裏に参るべき日なれば（今日は御所で公務がある日なので）、日たけぬさきに（日が高くなる前に、済ませたい）」

とのたまひて、御装束したまふ（と仰って、お着替えなさいます）。

出でたまふままに（お出掛けなさる時に）、降りて花の中に混じりたまへるさま（庭へ降りて花の中に混じりなさる姿は）、ことさらに艶だち色めきてももてなしたまはねど（特別に華やかに着飾っていらっしゃりはしないが）、あやしく（不思議と）、ただうち見るになまめかしく恥づかしげにて（ちょっと見かけただけで優美で畏くも立派で）、いみじくけしきだつ色好みどもになずらふべくもあらず（やたらめかし込む色男たちに比べるべくも無く）、おのづからをかしくぞ見えたまひける（自然と風情がおありです）。

朝顔引き寄せたまへる、露いたくこぼる（薫君が朝顔を引き寄せなさると、朝露がずいぶん零れ落ちます）。

「今朝の間の色にや賞でむ、置く露の消えぬにかかる花と見る見る　（和歌 49-03）

「寝起きには 涙の顔が 隠せない　（意訳 49-03）

*注に＜薫の独詠歌。『集成』は「消えやすい露よりもはかない朝顔に心を寄せた、薫らしい歌」。『完訳』は「はかない露より、もっとはかない朝顔の開花時間に共感する歌。大君の死を思い、世の無常を実感」と注す。＞とある。朝顔の果敢なさに果敢なく散った姉君を思えば哀悼の歌に見える。が、朝顔を引いた理由はこの歌を出すための枕だったのかも知れない。朝の内に妹君の顔色を窺っておこう、独り寝に泣き腫らしていないかと心配だから、

という僭越さも、姉君への哀悼を言い訳にすれば上手く隠れる、というわけだ。「露の消えぬにかかる花」は＜露が消えずに掛かっている花びら＞と＜涙の跡が残っている顔＞。「見る見る」や「聞く聞く」や「言う言う」の重ね言葉は現代語にも引き継がれているが、是は外見的に＜盛んにする＞という意味と、内心的に＜興味を持ってする＞という意味が同時に込められた言い方で、外見性がある分、芝居がかった演技ともなり易い。

はかな（はかないものだ）」

と独りごちて（と独り言を言って）、折りて持たまへり（その花を折って持って行きなさいます）。*女郎花をば（周りに沢山ある女郎花には）、見過ぎてぞ出でたまひぬる（目も呉れずにお出掛けなさったのです）。　*「をみなへし」は秋の野に群生する黄色い花で、実際に朝顔の周りに咲いていたのかも知れないが、「をば」の態々の言割りは、如何にも三条宮邸に仕える遊ばれ女たちを例えているらしい。高嶺の花に恋するのが男のロマン、というか尊い上昇志向なのだろう。

*明け離るるままに（日が明るくなるほどに）、霧立ち乱る空をかしきに（霧が立ち乱れる景色が幽玄に見えて）、　*「あけはなる」は＜夜がすっかり明ける。明け渡る。＞と大辞泉にある。「離る」の語感が＜離れる＞なので、闇から離れるとか、太陽が地平線から離れるようなことだとすれば、いやに分かり難い言い方に見えるが、「はなる」が「放つ」と同源語とすれば＜開ける＞でもあるので、「明け離る」は＜明るく開ける＞という語感かも知れない。ところでついでに思ったが、自分が勝手に自転して太陽の方を向いたり背を向けたりしていると思えば、朝が来るのも夜になるのも当たり前のような気もするが、天動説でものを考えたら、日が昇るのも夜の帳が下りるのも妙に不思議に思えてくる。それに、確かに、終わらない一日や明けない夜を不安に思う事もあったりする。それに、地動説に立ってみても、何でそうなっているのかを言い出せば、実は分からない。

「*女どちは、しどけなく朝寝したまへらむかし（亭主が留守の内儀の例で、御方ものんびりと朝寝をなさっているかも知れない）。　*「をんなどち」の「どち」は＜同類の複数名、同士＞をいう接尾語と古語辞典にあるが、補足に＜「ぬち」の転＞ともある。「ぬち」は＜～の内＞という言い方らしい。さて、「女どち」が＜おんなたち＞だとすれば、この文の述語は「朝寝したまへらむかし」という敬語遣いであり、二条院に対の御方以外の御部屋様の存在を想定するべきなのだろうか。が、そういう人が仮に居たとしても、此処で話題にすべき対象とは思えない。となると、この「女どち」は＜亭主が留守の内儀というものは＞という一般論の言い方、かと思う。

格子妻戸うちたたき声づくらむこそ（格子戸や妻戸を叩いて来訪を知らせる咳払いをするのは）、*うひうひしかるべけれ（気が引ける）。朝まだきまだき来にけり（朝の支度もまだの内に来てしまった）」　*「うひうひし」は＜気恥ずかしい→気が引ける＞。

と思ひながら（と薫君は思いながら）、人召して、中門の開きたるより見せたまへば（従者に命じて中門の開いている所から邸内を見渡させなさると）、

「*御格子ども参りてはべるべし（格子窓は上げられているようです）。女房の*御けはひもしはべりつ（女房の御世話申す気配も致します）」　*「みかうしども」の「御」は匂宮の家という格に対する敬称だろう。　*「おおんけはひ」の「御」は御方の世話という意味で、御方に対する敬称なのだろう。

と申せば（と報告申すので）、下りて（薫君は庭へ降りて）、霧の紛れに*さまよく歩み入りたまへるを（霧に紛れて都合よく目立たずに邸内に歩き入りなさると）、「宮の忍びたる所より帰りた

まへるにや(宮様が忍び通いの女の所からお帰りになったのだろうか)」と見るに(と女房たちが気付くと)、露にうちしめりたまへる香り(霧に湿って艶に漂う香りが)、例の(例の薫君の御体臭で)、いとさまことに匂ひ来れば(実に独特に匂い来るので)、　*「様良し」は＜見た目がいい。体裁がいい。＞と大辞林にあるが、霧に紛れているのだから姿は良く見えないはずで、むしろ、格式張らず事事しくないように訪問したい薫君にとっては、このように目立たないのが＜都合良い＞という文意なのだろう。

「なほ、めざましくはおはすかし(やはり中納言の君は目立っていらっしゃいますねえ)。心をあまりをさめたまへるぞ憎き(あまりに心静かでいらっしゃるのが憎らしいけど)」

など、*あいなく(などと行儀悪く)、若き人びとは、*聞こえあへり(若い女房たちは話し合っていましたが)、*おどろき顔にはあらず(取り乱す風も無く)、よきほどにうち*そよめきて(品良く衣擦れの音を立てて居立ちし)、御茵さし出でなどするさまも(御座布団を差し出したりする応接態度は)、いと*めやすし(実に都の宮家に相応しい無難な女房ぶりです)。　*「あいなし」は＜不調和だ＞とか＜興ざめだ＞とか、とにかく思わしくない事態に対して使われる形容詞らしい。此処では＜不遜だ＝行儀が悪い＞と読んで置く。　*「聞こえあへり」は渋谷校訂では終止形として文末の句点を置いている。が、この「り」は連用中止法の読点で下に続けるべきだ。中止法は多くの文意を取り得るが、此処では逆接で下に続く文意こそが最も分かり易く見える　*「おどろき顔」は＜驚いた顔つき。びっくりしたようす。＞と大辞泉にある。が、既に薫君に気付いて軽口を叩いている女房が、今さら驚く筈など初めから無い。此処で言う「驚く」の語幹「おどろ」は＜大きく並外れている＞みたいな語感かと思う。　*「そよめく」は＜そよそよと音がする。風にそよぐ。＞または＜衣ずれの音や人のざわめくけはいがかすかにする。＞と大辞林にある。　*「目安し」は＜無難だ＞だが、宇治の山暮らしの時の親しさとは違う、という薫君の皮肉が込められた語感。

「*これにさぶらへと許させたまふほどは(此処に控えるようにと席をお許し頂けるのは)、人びとしき心地すれど(一人前に扱われた気がしますが)、なほかかる御簾の前にさし放たせたまへる*うれはしさになむ(それでもなお、このように縁側に遠ざけなさるとご迷惑かと気兼ねされて)、*しばしばもえさぶらはぬ(とても気安くは伺えません)」　*「これ」は何処か。下に「御簾の前」とあるので廂の外とは即ち縁側の簀の子ではあるようで、御方は西の対に住まうらしいので、薫中納言は西の中門から庭を通って西の対の南表に座ったかと思うが、対屋の舎殿の高さとか階段があったのかどうかとか、庭の広さとか、とにかく分かり難い。昔ながらの二条院だとしても、改めて舞台の具象認識の乏しさを思い知る。　*「うれはし」は＜嘆かわしい。案じられる。＞で、「嘆かわしい」というと相手を＜情けない、非情だ＞と非難している言い方になりかねないので、此処では＜自分が不都合なことをしていると案じられる＝迷惑かと気兼ねされる＞くらいの言い方なのだろう。　*「しばしば」は＜度々、しきりに、幾度も＞と古語辞典にある。ただ、此処では回数よりも＜気楽さ、安易さ＞として読んで置く。

とのたまへば(と薫君が仰ると)、

「さらば、いかがはべるべからむ(では、いかが致しましょう)」

など聞こゆ(など女房は申します)。

「北面などやうの隠れぞかし(北廂などのような目立たない所だろうな)。かかる古人などのさぶらはむにことわりなる休み所は(このような昔馴染みが控えるに相応しい落ち着ける場所は)。

それも、また、ただ御心なれば(しかし、それもまた御方様の御考え次第なので)、愁へきこゆべきにもあらず(不平に申す事でもありませんが)」

とて、長押に寄りかかりておはすれば(と言って薫君が廂の下長押に寄りかかっていらっしゃると)、*例の、人びと(昔からの側近の女房たちが)、　*「れいの」は<いつもの>という副詞で、宇治の時からの古い側近女房が御方に申し上げる、という場面らしい。

「なほ、あしこもとに(やはり、あちらの殿のお側に)」

など、そそのかしきこゆ(などと御方を促し申し上げます)。

[第六段　薫、中君と語らう]

*もとよりも(薫君は元々)、けはひはやりかに男々しくなどはものしたまはぬ人柄なるを(物腰が強気な威圧的などではいらっしゃらない性格なのが)、いよいよしめやかにもてなしをさめたまへれば(ますます静かに落ち着いていらっしゃるので)、*今は(御方も今では)、みづから聞こえたまふことも(自ら応答申しなさる事も)、やうやううたてつつましかりし方(次第に拒み遠慮される事も)、すこしづつ薄らぎて、面馴れたまひにたり(すこしづつ和らいで、馴れて来ていらっしゃいました)。　*「もとよりも」は薫君が主語の話題らしい。文意からはそうと察せられるが、敬語遣いからだけでは主語が判然としない紛らわしい文だ。　*「今は」からは、御方が主語の話題らしい。そういう文意に取るのが最も分かり易そうだが、こういう分かり難い主語省略文を平気で書ける気は知れない。

「悩ましく思さるらむさまも、いかなれば(御不調でいらっしゃるというお加減は、如何いうことなのですか)」など問ひきこえたまへど(など中納言はお聞きなさいますが)、はかばかしくもいらへきこえたまはず(御方ははっきりとはお答え申しなさいません)。

常よりもしめりたまへるけしきの心苦しきも(いつもより元気が無くいらっしゃる御方の様子がおいたわしいのも)、あはれにおぼえたまひて(中納言は同情されなさって)、こまやかに(具体的に、宮のような男は多くの女を娶るものだという世の習わしを話し聞かせ)、世の中のあるべきやうなどを(その上での、夫婦仲の心構えなどを)、はらからやうの者のあらましやうに(実の兄であるかのように)、教へ慰めきこえたまふ(教え慰め申しなさいます)。

声なども、わざと似たまへりともおぼえざりしかど(声なども御方が特に姉君に似ていらっしゃるとは思っていなかったが)、あやしきまでただそれとのみおぼゆるに(今は不思議なくらいそっくりに思えるので)、人目見苦しかるまじくは(人妻との直面という、傍目に差し障る事情でなければ)、簾もひき上げてさし向かひきこえまほしく(簾も引き上げて差し向かい申し上げたいほどに)、うち悩みたまへらむ容貌ゆかしくおぼえたまふも(御不調の姿を見たい気持ちにお成りなるにつけても)、「なほ、世の中にもの思はぬ人は、えあるまじきわざにやあらむ(およそ女に執着の無い私でさえこうなのだから、増して、この世の中に恋をしない人などというものは、先ず居ないことだろう)」とぞ思ひ知られたまふ(とのように薫中納言には自分の男の性が思い知られなさいます)。

「*人びとしくきらきらしき方にははべらずとも(人並みに威風ある地位に就かずとも)、心に思ふことあり、嘆かしく身をもて悩むさまになどはなくて過ぐしつべきこの世と(悩みありて嘆かわしく体を壊すような事が無しに過ごせれば良いというのが人生だと)、みづから思ひたまへし(自分なりに考えていたが)、*心から(実際には自ら求めて)、悲しきことも(姉君の死を悼み奉り申す事も)、をこがましく悔しきもの思ひをも(妹君を匂宮に譲り奉り申したことを、今さら短慮だったと後悔する気持ちも)、かたがたにやすからず思ひはべるこそ(それぞれに冷静でいられないとは)、いとあいなけれ(実に情けない)。　*「ひとびとし」は＜人並みに＞ということらしいが、薫君は23歳で中納言に就く(竹河巻五章一段他)という抜群の出世ぶりで、この人がこういう言い方をすると、正に雲上人の戯言に聞こえる。　*「こころからかなしきこともをこがましくくやしきものおもひをも」は注に＜『完訳』は「前述から反転し、実際には自ら求めての憂愁の人生だと反芻。昨夜来の自省と同形式。「悲しきは--」は大君の死、「をこがましくは--」は中の君を譲ったこと」と注す。＞とある。

官位などいひて、大事にすめる(出世が一番と)、ことわりの愁へにつけて嘆き思ふ人よりも(尤もな儘ならぬ生活実感で嘆く人よりも)、これや、今すこし*罪の深さはまさるらむ(こういう悩みは、今少し個人の確執の罪が深いかもしれない)」　*「つみのふかさ」は注に＜『完訳』は「自分の場合は、仏の戒める愛執の罪から逃れられぬとする」と注す。＞とある。とすると、「ことわりの愁へ」という物質欠乏を嘆く生活実感は罪が浅い、と仏教では考えるのだろうか。私には物質感と愛憎は表裏一体に見える。

など言ひつつ(などと言いつつ薫君は)、折りたまへる花を、扇にうち置きて見ゐたまへるに(折り取って持ってきた朝顔の花を扇の上に置いて眺めていらっしゃると)、やうやう赤みもて行くも、なかなか色のあはひをかしく見ゆれば(次第に赤味が増してゆくのが、枯れ花の萎えだというのに却って、その未練がましい色合いが情趣豊かに見えるので)、やをらさし入れて(そっと御簾の裾から内に差し入れて)、

「よそへてぞ見るべかりける、白露の契りかおきし朝顔の花」(和歌 49-04)

「白露の　掛かる朝顔　手折りせば」(意訳 49-04)

*注に＜「白露」を大君に、「朝顔の花」を中君によそえる。『完訳』は「「朝顔」「露」の組合せを基盤に、人間のはかなさ、中の君との縁の薄さを嘆く」と注す。＞とある。「朝顔」と「露」の組み合わせ、ということなら、此処にオチが着いた感はある。和歌 49-03 での「露」は独り寝に泣く御方の涙だった。が、其処での歌詠みにも、果敢なく散った姉姫を「露」に準える追悼意は下敷きにされていた。そして此処では、より具体的に姉君を「露」に準えて、姉姫が身代わりに立てた妹君を「朝顔」に準えている。それも、その「露」を「白露」と言う事で＜処女で死んだ姉君＞を示し、それを意味する＜白い朝顔の花＞を薫君が手折って来たことと、その白い花が＜赤紫に退化して行く姿＞に＜女になって生きるがゆえに悲しい妹君＞が示されて、その責任を自分が負っていることまで示す、という非常に凝った仕掛けだ。そして、そのように準えている事を「よそへてぞ見る」と明示するという珍しい詠み方となっている。人を物に＜寄そふ(例える)＞のは歌詠みの約束事であって、明示しなくても暗意して詠む所に和歌の味わいも工夫もありそうな気がするが、それを敢えて明示するのは、事物の情趣を損ねてまでも率直な心情を伝えたいという強い意志が示されている、と読むべきなのだろう。また、「よそへてぞ見るべかりける」は当然にも＜寄り添う相手として世話するべきだった＝自分があなたと結婚すべきだった＞という言い方で、「白露」にではなく「朝顔」に掛かっていて、是が表意だとすると人妻に対しては、あまりに露骨な口説き文句に見えるが、裏意にしても隠す意

図が感じられないほどの率直さだ。ただ、下句は意外に分かり難い。「契りかおきし」の「か」は疑問の係助詞だろうが、だとすると是は＜契りとして置いたのだろうか＞という言い方になり、であればこの「契り」は動詞ではなく名詞なので＜「白露の契り」＝姉君が約束した＞という読み方は成立しない。また実際に、姉君が薫君に何かを約束した事もない。この「ちぎり」は＜宿縁、因縁＞であり、「白露の契りかおきし」は＜白露（であった姉君）が薫君と因縁の人であると思い込んでいたらしい＞という言い方で「朝顔の花（である妹君）」に修辞して掛かっている。

「*ことさらびてしももてなさぬに（殊更に態とでも無いだろうに）、露落とさで持たまへりけるよ（花の露を落とさないで持っていらっしゃったものだ）」と、をかしく見ゆるに（と御方は中納言の差し入れた扇の上の朝顔を風情があると思えたが）、置きながら枯るるけしきなれば（露が残ったまま枯れて行く様子なので）、　*「ことさらぶ」は＜わざとそうする＞だが、薫君は「今朝の間の色にや賞でむ置く露の消えぬにかかる花と見る見る」（和歌 49-03）と花を手折る時に詠んでいて、初めから「露の消えぬ」間に開花時間が終わる朝顔の果敢なさを意識していたのであり、その事情を語った地文が薫君の＜わざとらしさ＞を否定するのは変だ。とはいえ、確かにこの項には敬語遣いは無い。しかし、「しも」は強調の副助詞と説明されるが、この語には仮定構文に於ける可能推量の係助詞語用があるように私には思えるので、この「もてなさぬに」を一般論の言い回しと解せば、この「ことさらびてしも」からを御方の内心文と見ることは可能だろうし、話の合理性から見れば、そう取るべきかと思う。

「消えぬまに枯れぬる花のはかなさに、おくるる露はなほぞまされる　（和歌 49-05）

「枯れ急ぎ　花は朝露　消えぬ間に　（意訳 49-05）

*注に＜中君の返歌。薫の「露」「花」の語句を用いて、「花」を大君に「露」自分によそえて、「なほぞまされる」（私のほうがさらに頼りない）と返す。＞とある。となると、贈歌の方も「花」を姉君に「露」を御方に準えてあるのかと見直すが、それは難解に過ぎる。あくまでも、扇の上の朝顔を見て、それぞれの思いの丈を言い合った、という趣向らしい。

*何にかかれる（花が失くなっては露は降りる足場がありません）」　*「なににかかれる」は与謝野訳文に＜露の命ぞ＞と補語されている。そして、この添え句を伴って、上の歌は完成しているように見える。即ち、上歌だけでは未完成または言葉足らずの印象だ。が、歌では、下に言葉が省かれるのも、言い尽くさないで置くのも、余韻を残す味わいの一つでもあり、そういう言い方でしか言うに言われぬ気持ちを示せない、という独特の情文なのだろう。「何に」は不明な「何か」を「に」の格助詞で目的語とする打ち消し文型。「かかれる」は、「懸く（掛ける）」の未然形「かか」に可能受身の助動詞「る」の連用形「れ」が付いたものに、形態助動詞「り」の連体形「る」で言い切られた、言外に「ぞ」と目的語の「露」を強く示唆する文型。文意は＜何を頼りに寄り掛かる事が出来ようか、いや出来ない＞で、有機物の花は土に還れば良いが、無機質の露水は跡形もなくなる、みたいな情緒かと思う。此処では正に情緒を言っているのでそれで良いのだが、無機質という物の見方も、あくまで人間生活の特に物流上の経済活動にとっての便利な考え方に過ぎないのであって、水が構造物であり、水素原子二個と酸素原子一個がイオン結合した構造組織体であるとは広く認識されている。

と、いと忍びて言も続かず（と、とても小さな声で返歌なさり、添え句の言葉も続かずに）、つつましげに言ひ消ちたまへるほど（遠慮がちに言いよどみなさるところが）、「なほ、いとよく似

たまへるものかな(やはりとてもよく姉君に似ていらっしゃるものだ)」と思ふにも(と思うにも)、まづぞ悲しき(中納言は先ずは悲しいのです)。

[第七段　薫、源氏の死を語り、亡き大君を追憶]

「秋の空は、今すこし眺めのみまさりはべり(秋の空はどうしても物憂げにばかりなりがちですので)、つれづれの紛らはしにもと思ひて(何となく気晴らしにと思って)、先つころ、宇治にものしてはべりき(先日に宇治に行って来ました)。庭も籬もまことにいとど荒れ果ててはべりしに、堪へがたきこと多くなむ(庭も垣根も実にひどく荒れ果てていましたので、寂しく思われる事が多くありました)。

*故院の亡せたまひて後(亡き父院の光君がお隠れの後は)、*二、三年ばかりの末に、世を背きたまひし嵯峨の院にも(二、三年ほど晩年に出家なさっていた嵯峨院にも)、六条の院にも(元の御住まいである六条院にも)、さしのぞく人の(立ち寄る人は)、心をさめむ方なくなむはべりける(心穏やかにはいられないようでした)。*木草の色につけても(当時は、主を失くした院庭の木や草の様子を見るにつけても)、涙にくれてのみなむ帰りはべりける(涙に暮れるばかりで帰ったものです)。　*「こゐん」は注に＜光源氏をさす。＞とある。また、「亡せたまひて後」は＜「さしのぞく人の」以下に係る。＞とある。　*「二、三年ばかりの末に世を背きたまひし嵯峨の院にも」は注に＜光源氏は亡くなる二、三年前に出家をしたという。初見の記事。＞とある。こういう話題が何のテライもなく語られるところに、必ずや光君の最晩年が描かれた稿はあるに違いない、という気になる。少なくも、匂兵部卿巻の出だしに先立つあらましごとだけであっても、幾分かの脱稿が無ければ、そも匂宮巻が読み出せない、とは既にノートしたかと思う。そんな事を、また思い出させる記事だ。入道宮が六条院から三条宮邸に移ったのも、恐らくはこの光君の出家に伴うか先立つかしていただろうし、薫君が冷泉院に出入りするのも光君の出家との絡みがありそうで興味深いが、本文が無いのだからこうした断片に注意する他はない。ただ、匂宮巻が光君の喪明けあたりから語りだされているだろうという推測は今も変わらないので、光君は薫君が 12 歳くらいの時に 60 歳くらいで亡くなった、という大筋で良いかと思う。12 歳なら、もう大体のことは分かる年齢なので、「心をさめむ方なくなむはべりける」は薫君の実体験として語れるのだろう。それと、「秋の空」と振った後でこの話題を語るということは、光君は秋に逝去した、とは強く推測される。　*「きくさのいろにつけても」は、当時の六条院の荒廃ぶりと今の宇治山荘とを比べてみる、という主旨らしいが、喪中で光を消していただけの天下の六条院と宇治の隠棲庵とでは引き合いに出すべき釣り合いには思えないが、御方も六条院を見た事があるのだろうか、あるとすれば、実地を知る場所の話題ではあるのだろう。

かの御あたりの人は(亡き父院にお仕え申していた人びとは)、上下心浅き人なくこそはべりけれ(身分の上下に関わらず忠誠心の浅い人は居ませんでしたが)、*方々集ひものせられける人びとも(御方々が集めて使っていらっしゃった女房たちも)、皆所々あかれ散りつつ(皆それぞれの伝手に散り別れて)、おのおの思ひ離るる住まひをしたまふめりしに(御方々各位も隠居生活をなさったようですが)、はかなきほどの女房などはた(是と言って身寄りの無い女房などはまた)、まして心をさめむ方なくおぼえけるままに(どうにも身の置き所が無いままに)、ものおぼえぬ心にまかせつつ(風任せに)、山林に入り混じり(都を離れて)、すずろなる田舎人になりなど(ただの田舎者に成るなど)、あはれに惑ひ散るこそ多くはべりけれ(不甲斐無く迷い散る者が多くありました)。　*「かたがた」は六条院と二条院で暮らしていた＜御方々＞なのだろう。「集ひものせられける」の「集

ひものす」は＜集めて使う＞という他動詞で、「らる」は＜御方々＞に対する敬語で、「けり」は「人びと」を修辞する状態の助動詞、と読んで置く。

さて（そのようにして）、なかなか皆荒らし果て（後の事がなかなか決まらないまま六条院も荒れ果てて）、忘れ草生ほして後なむ（忘れ草が生えた後になって）、この右の大臣も渡り住み（わが兄君の右大臣も移り住み）、宮たちなども方々ものしたまへば（女一の宮や二の宮や三の宮などもそれぞれお住みになったので）、昔に返りたるやうにはべめる（昔の栄光を取り返したようでございます）。

さる世に（父院が亡くなった当時に）、たぐひなき悲しさと見たまへしことも（無類の悲しい出来事と思い申した事も）、年月経れば、思ひ覚ます折の出で来るにこそは、と見はべるに（年月が経てば、冷静に考える事が出来るようになるものだ、と思いますと）、げに、限りあるわざなりけり、となむ見えはべる（確かに、悲しみは限りあるものだ、とのように思えます）。

かくは聞こえさせながらも（とは申せ）、*かのいにしへの悲しさは（父院が亡くなった昔の悲しみは）、まだいはけなくもはべりけるほどにて（まだ幼かった時のことなので）、いとさしもしまぬにやはべりけむ（然程は良く分かっていなかったのかもしれません）。　*「かのいにしへの悲しさ」は注に＜光源氏の死去。薫の九歳前後。＞とある。何を根拠に「薫の九歳前後」と言えるのか私には分からないが、そう言えるくらいなら、年立てや巻序をその論拠に基づいてすっきりと整理して提示してもらいたい。こんな日本を代表するとされる古典が、その細かな問題がいつまでも残るのは止むを得ないとしても、大筋での構成くらいは専門家の学会に於いて整理されていて然るべきだ。

なほ、この近き夢こそ（やはり、この最近の姉姫との死別の悪夢が）、覚ますべき方なく思ひたまへらるるは（覚ます方法も無く思われますのは）、同じこと、世の常なき悲しびなれど（同じような世の無常の悲しみでも）、罪深き方はまさりてはべるにやと（執着の罪深さは勝っておりますかと）、それさへなむ心憂くはべる（そのことさえ懸念されます）」

とて、泣きたまへるほど、いと心深げなり（と泣きなさる中納言の様子はとても親身そうです）。

昔の人を（故姉君を）、いとしも思ひきこえざらむ人だに（然程はお知り申し上げない二条院の女房でさえ）、この人の思ひたまへるけしきを見むには（薫君の悲しんでいらっしゃる姿を見れば）、すずろにただにもあるまじきを（軽々しく平然と応接できないが）、まして（まして妹君の御方は）、我もものを心細く思ひ乱れたまふにつけては（自身も先行きを心細く思い乱れなさることもあって）、いとど常よりも、面影に恋しく悲しく思ひきこえたまふ心なれば（いっそう普段よりも、姉君の面影を恋しく悲しく思い申しなさる気持ちなので）、今すこしもよほされて、ものもえ聞こえたまはず（どうしても涙を禁じえず、何も仰れません）、ためらひかねたまへるけはひを、かたみにいとあはれと思ひ交はしたまふ（気持ちを抑えかねていらっしゃる気配を、中納言と御方は互いに本当に同情して思い交わしなさいます）。

［第八段　薫と中君の故里の宇治を思う］

「*世の憂きよりはなど（山里は物寂しいが煩わしい都暮らしよりは住み易い、などと）、人は言ひしをも（昔の人は歌に詠んであるが）、さやうに思ひ比ぶる心もことになくて（そのように宇治を思い比べる気も特に無くて）、年ごろは過ぐしはべりしを（この数年は過ごして来ましたが）、今なむ、なほいかで静かなるさまにても過ぐさまほしく思うたまふるを（今になって、やはり何とか静かに暮らして生きたいと思いまするものの）、さすがに心にもかなはざめれば（そうは言っても、そのように勝手に身を処せる立場ではありませんので）、弁の尼こそうらやましくはべれ（弁の尼が羨ましく思えます）。　*「よのうきよりは」は注に＜以下「となむ思ひはべりつる」まで、中君の詞。『源氏釈』は「山里はもののわびしきことこそあれ世の憂きよりは住みよかりけり」（古今集雑下、九四四、読人しらず）を指摘。＞とある。

*この二十日あまりのほどは（亡き父宮の御命日に当たる今月の二十日過ぎには）、かの近き寺の鐘の声も聞きわたさまほしくおぼえはべるを（あの山寺の鐘の声も聞き入りたく思いますので）、忍びて渡させたまひてむや（目立たぬように宇治へお連れ頂きたい）、と聞こえさせばやとなむ思ひはべりつる（とお頼み申せたらと思っておりました）」　*「この二十日あまりのほど」は注に＜八月二十日過ぎ。父八宮の命日。＞とある。

とのたまへば（と御方が仰ると）、

「荒らさじと思すとも（山荘を荒らすまいとお考えになっても）、いかでかは（いかんとも出来ますまい）。心やすき男だに（気軽な男でさえ）、往き来のほど荒ましき山道にはべれば（往来が困難な山道ですので）、思ひつつなむ月日も隔たりはべる（気懸かりではあっても何ヶ月も遠のいてしまいます）。

故宮の御忌日は（故宮の御忌日法要は）、かの阿闍梨に、さるべきことども皆言ひおきはべりにき（山寺の阿闍梨に成すべき事柄を全て言い置いて来ています）。かしこは、なほ*尊き方に思し譲りてよ（あの山荘はやはり尊い御参所と思い山寺にお譲りなさって）、時々見たまふるにつけては（時々御見舞申すますたびに）、*心惑ひの絶えせぬもあいなきに（姉君への執着が忘れられないのも困るので）、罪失ふさまになしてばや（そういう業罪を消滅させるような形にしてはどうか）、となむ思ひたまふるを（とのように考えておりますが）、またいかが思しおきつらむ（他に何かお考えがおありでしょうか）。　*「たふときかた」は＜尊い仏道の参拝所＝寺＞ということらしい。注には＜宇治山荘を寺に改めてはという提案。＞とある。　*「心惑ひの絶えせぬもあいなきに」は薫君の勝手な事情のようにも聞こえるが、是が御方にとって説得力があるとすれば、薫君に思われる姉君の女の業も読経によって償われる、という理屈があるのだろうか。注には、「罪失ふさまになしてばや」について＜『完訳』は「自分の、大君ゆえの愛執の罪を消滅させるよすがにしたい、とする。寺への改造を勧めるゆえん」と注す。＞とある。

ともかくも定めさせたまはむに従ひてこそは、とてなむ（とにかく、あなたがお決めなさる事に従って事を運ぶ事が本筋と考えていますので）、あるべからむやうにのたまはせよかし（お望みのままに仰ってください）。何事も疎からず承らむのみこそ（全て尊重して承るのが）、本意のかなふにてははべらめ（私の本意に適う所です）」

など(など薫中納言は)、まめだちたることどもを聞こえたまふ(山荘の実務処理の話なども申し上げなさいます)。

*経仏など(そういう思惑もあって中納言は経典や仏像の奉納などをして)、この上も供養じたまふべきなめり(今回の法要でも盛大に供養なさる心算のようです)。かやうなるついでにことづけて(その出席を口実に御方は宇治に出向き)、やをら籠もりゐなばや(そのまま出家隠棲してしまおう)、などおもむけたまへるけしきなれば(などという意向をお持ちの様子なので)、　*「きゃうほとけなど」の文について、注は＜『集成』は「経巻や仏像などを、この上ととも寄進なさるお積りらしい。山荘を寺にという薫の意図を忖度する草子地。通説に中の君のこととするが、文の呼吸に合わない」。『完訳』は「このうえとも。一説には、中の君も。語り手の推測の一文」「中納言はご自身もさらに経巻や仏像などを供養なさるおつもりらしい」。『新大系』は「中君に申し上げた以上の事までも（薫は）。「この上」を細流抄・湖月抄などは、中君のことと解する」と注す。＞とある。専門家でも意見が一致しない紛らわしい文、ではありそうだ。であれば、勝手に解釈したい。まず、此処までに「対の御方」を「上」と呼称したことは無いので、この場面で行き成り＜「この上」＝対の御方＞とは取り難いし、「うへ」は正妻または実質の内務管理者＝北の方に対する呼称かと思われ、対の御方は全体管理者の地位には居ないことからも、その解釈は排する。といって、比較対象が示されていないので、「この上」を一般副詞の＜この上更に＞という場面とも思えない。で、この「この上」の「上」は＜事情、場合＞の意味であり、「この上」とは＜今回の事情＝故宮の忌日法要＞で、「この上も」の「も」が＜薫君が山荘を山寺に寄進する意図があることもあって＞という文意になる、かと思う。つまり、「供養じたまふべし」の主語は薫君だ。

「いとあるまじきことなり(それはいけません)。なほ、何事も心のどかに思しなせ(やはり何事も穏やかに事を進めませんと)」

と教へきこえたまふ(と教え申しなさいます)。

[第九段　薫、二条院を退出して帰宅]

日さし上がりて(日が高く上がって)、人びと参り集まりなどすれば(様々な役目の女房たちが御方の部屋に参集して来るので)、あまり長居もことあり顔ならむによりて(あまり長居するのも何か訳が有りそうに目立つので)、出でたまひなむとて(中納言はお帰りなさろうとして)、

「いづこにても(何処に行っても)、*御簾の外にはならひはべらねば(縁側に置かれるのは馴れていませんので)、*はしたなき心地しはべりてなむ(落ち着かず、長居出来ない気が致します)。今また、かやうにもさぶらはむ(今度また、同様な形ででも伺いましょう)」　*「みすのと」は＜縁側＞。　*「はしたなし」は＜きまりが悪い＞という語用が多く、そういう目に遭わされたという意味で＜迷惑だ、恥を掻かされた＞という言い方にもなるようだが、また、此処でもそういう皮肉は込められているだろうが、「ならひはべらず」を受けて、いそいそと帰ると言う事の説明としては＜落ち着かない＞くらいになるかと思う。

とて立ちたまひぬ(と言って、席をお立ちになりました)。「宮の、などかなき折には来つらむ(匂宮が、何故中納言は私の留守中に来たのだろう)」と思ひたまひぬべき御心なるもわづらはしくて(と、お思いになるかもしれない御疑念も面倒なので)、*侍の*別当なる(二条院の従者長を実質で務める側近の、それを名目上は特別担当職として)、*右京大夫召して(食い扶持の公務役職名は右京奉行である者を呼び寄せて)、　*「さぶらひ」は「侍所(さぶらひどころ)」のことで、「侍所」は＜

平安時代、院・親王・摂関・公卿家などに仕え、その家の事務をつかさどった侍の詰め所。また、警護の武士の詰め所。さむらいどころ。＞と大辞泉にある。親王の親衛隊だから個人的な信頼関係は厚いだろうが、役職は家司の類なので政治性は低い。 *「べったう」は＜本官の他に別の役職を担当すること、またその人＞ということらしいが、侍所の主任は皇子の側近で、その事自体が権威であり誇りでもある筈だ。従って「別当」と言っても、この守衛職の方が本職なのだろう。 *「右京大夫」は「うきゃうのかみ」と読みがある。大辞泉には「うきゃうのだいぶ」で＜右京職（うきょうしき）の長官。正五位上相当。うきょうのかみ。＞とある。「右京職（うきゃうしき）」は＜右京を治安管轄した役所。＞と古語辞典にある。実質では、此方が名目上の役職なのだろう。

「昨夜まかでさせたまひぬと承りて参りつるを（宮様は昨夜御所を退出されたと承知して参上しましたが）、まだしかりければ口惜しきを（まだのようですので残念です）。内裏にや参るべき（御所に参上すべきでしょうか）」

とのたまへば（と薫君が仰ると）、

「今日は、まかでさせたまひなむ（今日はお帰りなさいます）」

と申せば（と別当が申すので）、

「さらば、夕つ方も（では夕方にでも、また参ります）」

とて、出でたまひぬ（と言ってお帰りになりました）。

なほ、この御けはひありさまを聞きたまふたびごとに（やはりこの対の御方の気配や存在を御簾越しにでもお聞きなさる度に）、などて昔の人の御心おきてをもて違へて（どうして故姉君の御考えを取り違えて）、*思ひ隈なかりけむと（狭量な判断をしてしまったのだろうかと）、悔ゆる心のみまさりて（後悔する気持ちばかりが勝って）、心にかかりたるもむつかしく（妹君が気になって仕方がないのも煩わしく）、「なぞや（何ということか）、人やりならぬ心ならむ（全部自分の所為ではないか）」と思ひ返したまふ（と反省なさいます）。 *「思ひ隈なし（おもひくまなし）」は＜思い汲まず＞との掛詞ではないかと以前にもノートしたような気がするが、是は＜人を思い遣る余裕がない＞みたいな言い方らしい。

*そのままにまだ精進にて（薫中納言は一昨年十一月の姉君のご逝去以来、そのまま今だに御自身は修行生活に勤しんで）、いとどただ行なひをのみしたまひつつ（いっそうひたすらに読経勤行ばかりをなさって）、明かし暮らしたまふ（日々を送りなさいます）。 *「そのままにまだ精進にて」は注に＜薫は大君の死後なお精進生活を続けている。＞とある。「精進（さうじん、しゃうじん）」は仏道の修行生活をいう語らしく、例えば＜肉食をやめ、菜食すること。＞であり＜戒律を守ったり、禁忌を避けたりして心身を清らかに保ち、信仰に励むこと。＞と大辞林にあり、その「禁忌」には＜女断ち＞も含まれるのだろう。先に「女郎花をば見過ぎてぞ出でたまひぬる」（二章五段）とあったのは、ただの軽口でもなかったか。

母宮の（薫君の母入道宮の）、なほいとも若くおほどきて、しどけなき御心にも（まだとても若くおっとりとして、厳しさの無い御考えにも）、かかる御けしきを（こうした薫君の御様子を）、いとあやふくゆゆしと思して（とても頼り無く非常に心配にお思いになって）、

「*幾世しもあらじを(私も余命幾ばくと無いので)、見たてまつらむほどは(お目に掛かっている内は)、なほかひあるさまにて見えたまへ(やはり産んだ甲斐のある元気に宮仕えする姿を見せてください)。　*「いくよしもあらじを」は注に＜以下「とおぼゆる」まで、女三宮の詞。『異本紫明抄』は「幾世しもあらじ我が身をなぞもかくあまのかるもに思ひ乱るる」（古今集雑下、九三四、読人しらず）を指摘。＞とある。難しいことを言っているように見えない引歌だが、呪文のように意味不明だ。ざっとウエブ検索した限りでは分かり易い説明もない。しかし、もし＜余命幾ばくも無い＞という意味を、如何にもクセのある「幾世しもあらじ」という言い方にした意図があるとしたら、この歌を読み解かなければならない。妙なところで面倒を掛けられる。ま、当て図法を試みる。と、「いくよ」は「幾世・幾代(多くの年代→長い年月)」と「幾節(多くの節がある草木)」の掛詞かもしれない。で、節の多い「海人の刈る藻」に縁付く。で、「海人の刈る藻」は「思い乱る」を言い出す序詞ということで、「アタリ前田のクラッカー」よろしく洒落が利いている言い回しなのだろう。で、歌筋は＜そんな複雑な人生じゃない私なのに、何であんたなんかに引っ掛かって思い乱れるんだろう＞みたいなノロケかボヤキ。で、此処での「いくよしもあらじを」に特別な意味が何か有るのかと思えば、どうやら海人つながりで、入道の尼だけに、「かひあるさま」の「かひ」が＜甲斐＝張り合い＞と＜貝＞の掛詞になっている、というだけのことらしい。いや、半ば自棄気味に言えば、それくらいの言葉遊びであってくれた方が楽しいかも。

世の中を思ひ捨てたまはむをも(あなたが出家なさろうというのも)、かかる容貌にては(このような尼の身では)、さまたげきこゆべきにもあらぬを(妨げ申せるものではないが)、この世の言ふかひなき心地すべき心惑ひに(この世に生きる張り合いのない気に成る悲しみに)、いとど罪や得むとおぼゆる(いっそう罪深く成ると思えます)」

とのたまふが(と仰るのが)、かたじけなくいとほしくて(有難く愛しくて)、よろづを思ひ消ちつつ(全ての喜怒哀楽を隠して)、御前にてはもの思ひなきさまを作りたまふ(母宮の前では薫君は悩みの無い表情を作りなさいます)。